



日本海海戦を  
転機とした男たち

5

# 加藤友三郎 司令長官とともに艦橋に立ち続けた男 弾雨の中、

「艦長、取舵（とりかじ）一杯に！」

日露戦争の日本海海戦で有名な敵前大回頭。勝敗を分ける大きな一手となったこの戦法は、連合艦隊参謀長 兼第一艦隊参謀長・加藤友三郎の一声で敢行されました。山本権兵衛、東郷平八郎と並び「日本海軍の三祖」と呼ばれる加藤は、広島出身の海軍兵学校七期卒。連合艦隊第二戦隊司令官の島村速雄とは同期でした。

その性格は冷静沈着で、部下がどのような過誤失策をしても叱責面罵するようにはなかつたといひます。一方、あまり喜怒を表に出さないことから、「冷血で人情味がない」と見る人たちがもいたさうです。

日清戦争では、防護巡洋艦「吉野」の砲術長として活躍。敵艦から砲撃を浴びつつも、最適な距離まで接近して急速射撃を行ない、敵艦に集中砲火を浴びせるという軍功を挙げました。

そんな加藤の緻密な計画力と実行力を、連合艦隊司令官の東郷も信頼していたのでしよう。

でしよう。

日本海海戦で、突進してくるバルチック艦隊に対し、気が気でない砲術



加藤友三郎  
(国立国会図書館蔵)

長の安保重清は、「もう八千五百であります！」と敵艦との距離を叫び、次の行動を促しました。しかし、東郷も加藤も動じません。

加藤は「正確なところを計ってくれ」と、改めて敵艦との距離計測を依頼。安保が敵の旗艦スワロフとの距離が八千メートルであると報告すると、ついに連合艦隊は動きまゝです。東郷の合図に従い、加藤が取舵を伝達。それは、敵艦隊に頭を突っ込むような大胆な作戦で、艦長の伊地知彦次郎が「取舵になさるのですか」と聞き返すほどでした。こうして旗艦「三笠」は、海戦史に名を留めることとなる敵前大回頭をするのです。

先頭艦の「三笠」は敵艦隊から集中砲火を浴びますが、東郷も加藤も艦橋に立ち続けました。そんな二人の姿に、兵士たちの士気も高まったといわれています。

もし、加藤が前述のとおり冷血な人間であったならば、艦橋に残らず、安全な司令塔への移動を進言したことでしょう。このエピソードは、加藤が胸に熱いものを秘めた人物だった証ともいえるのかもしれませんが。

日露戦争後、加藤は海軍大臣、首相を歴任し、「国防は軍人の専有物にあらず」という名言を残すのです。



日本海海戦で旗艦として戦った戦艦「三笠」は、大正15年（1926）に記念艦となり、現在の位置に固定されました。

「三笠」入口で「本誌を見た」と言われた方は入艦料を100円値引きします（一般のみ）。

入艦料	区分	一般	シニア	高校生
1名	一般	600円	500円	300円
	20名以上	500円	500円	200円

観覧時間	4月～9月	3月・10月	11月～2月
	9:00～17:30	9:00～17:00	9:00～16:30

